平 28 年度　市長懇談会「庄原いちばん談議」

（認知症の人を支える家族の会・庄原「橙の会」）

会　　場	愛生苑　会議室
日　　時	平成 28 年 10 月 6 日（木）　19：00～20：00
出 席 者 数	参加者 14 人、市 7 人
懇談テーマ	暮らしの安心・安全／保健・福祉

懇　談　内　容

■開会（進行：行政管理課長）

■あいさつ　市：木山市長

認知症の人を支える家族の会・庄原「橙の会」代表　渡邉　蓉子さん

■自己紹介

■懇談テーマ「暮らしの安心・安全／保健・福祉」について

■提言①「認知症カフェ」は、各市町で設置が進められていますが、認知症施策において、今後どのように活用していかれますか？庄原市としての関わり方も含め、その方向性をお示しください。

（市長）

「第 6 期高齢者福祉計画」に認知症支援体制の充実を掲げ、「認知症カフェの設置」を重点事業として取り組んでいる。特に、認知症に関する身近な相談場所として「認知症のカフェ」を位置づけており、カフェを通じて相談や情報交換、住民同士の交流により認知症に対する理解をしっかり深めていく取り組みが必要であると認識している。

現在、「認知症カフェ」が庄原、西城、東城の 3 地域にあり、認知症の方を支える家族の会にカフェの運営を委託している。認知症カフェの機能がしっかり発揮できるよう、カフェの運営や活動を検討する場に、市の職員を参加させ「家族の会」の皆さんと連携しながら一緒に取り組んで参りたいと考えている。

また、認知症サポーター養成講座を設けており、協働して取り組んでいけるような環境づくりや現在の取り組みを継続するとともに、設置地域の拡大について考えている。

（参加者）

拡大との言葉が出たが、どうしたら拡大できるのでしょうか？お誘いしても交通手段が無くて広がらないことが私たちの悩みでもある。

（市長）

今日、100 歳の敬老のお祝いに回った。元気で自分の足で立って歩いて、出かける範囲を自分で作って、ちょっとのお出かけが大事であるといいながら歩いた。

しかし、自分にもしたいことがあるし、出かけることは気兼ねでもある。やっぱり自分の家が一番いい。転ばないよう気をつけ、迷惑をかけないようにすることが一番と言われる。

公的な立場として、気兼ねなく利用できる体制を作っていかなければならないと考えるが、全ての場所に作っていくことは財政的にも人員の確保の面からも難しいところがある。

しかし、拡大に向けて取り組もうとの考えはいつも持っており、平成28年度から地域包括支援課という新たな課を設け、拡大に向けて取り組んで参りたい。そのために、もっとしっかりと市民とキャッチボールをしながら取り組んでいく必要があると考えており、今日の懇談を通して、そういう考えを更に強く持ったところです。

（参加者）

私のところで最近サロンを始めたら、すごく喜んで沢山参加してもらえる。しかし、体の不自由な人や山道を 1km ぐらい歩かないといけない。そういった本当に参加してもらいたい方に参加してもらえない。何とかそういう方の手足となれる人がいないか探しているが難しい。何か良い知恵があれば教えてもらいたい。

（生活福祉部長）

送迎の問題があることは認識している。非常に広範囲でもあり、なかなか制度としてはうまくいかないが。地域の皆さんで、双方の理解の中でボランティアとして対応できれば一番いいと思う。また、社会福祉協議会には有償ボランティアの制度もあり、条件があうかどうかケースバイケースではあるが、お出かけ応援隊の活用についても相談いただきたい。逆に何か良い提案があれば一緒に考えていきたい。

（参加者）

送迎についてですが、会員にしっかり参加してもらって、会話により負担の軽減につなげたいが、高齢で自分の車では無理である。ボランティアの運転手も高齢化しており、双方の合意とはいいながら事故があった場合には、双方が気まずくなる。そのへんをもう少し考えていただけたらと思います。

（市長）

例えば、身近なところでゲートボールやグラウンドゴルフなど、送迎事故も多く発生しており、重大事故も起きている。送迎は関係が良くても難しい問題である。参加団体向けの保険も用意されているケースもあるので活用してみて欲しい。

（参加者）

認知症の家族を抱える若い方に出向いてもらいたい。昔は、認知症の方を嫁さんが面倒を見ていたが、地域から悪者扱いにされることが多かった。白い目で見られていた。

市役所として何か大きなイベントを仕掛けて、多くの人を集めて欲しい。

（市長）

いずれは自分たちの番になる。いずれは私たちも通る道を、子どもや孫にも見せて、肌で感じて欲しいと思っている。大きな網で、ひとを集めていくことも大事であるが、体験者として、この会を次の時代、そして次の次の時代につなげていく工夫を考えていくことが大事ではないかと考えている。

家族に持てば、真剣に考えていくと思うし、こういう会があるということを広く知ってもらうことが大事である。

■提言②「認知症の人を支える家族の会」がもっと周知されるとともに、本会を庄原市の認知症対策にお役立てくださることを希望しますが、どのようにお考えでしょうか。

（市長）

「家族の会」の皆さんには、当事者でないとできない又は当事者でないとわからない立場で、認知症施策の大きな役割を果たしていただいております。

認知症に対しては、相談があった場合に、会の紹介をさせていただいているが、やはりこういう活動団体があるということを、広報しょうばらや様々な広報媒体を使って、みなさんの会をもっとお伝えしていく必要があると考えている。

（参加者）

「橙の会」自体が、どういうものであるのか、これだけ回覧や記事、告知端末での放送など、配慮をしていただいているが、実際にはほとんど知られていない。

（生活福祉部長）

「橙の会」の活動内容や、「認知症カフェ」については、介護保険等で相談者に来られた方へ紹介はしているが、もう少し丁寧に説明していく必要があったのではと反省をしている。今後は、もっと踏み込んで会の活動内容を説明し、紹介していきたい。

提案があった民生委員や高齢者巡回相談員、老人クラブなどの会合には、定期的に職員が出席しているため、会の紹介や活動内容について説明をしていきたい。

（参加者）

職員の参加については、具体的にはどのようにお考えか。

（市長）

認知症サポーター養成講座を実施しており、多くの職員の認知度を高めて、関わりをしっかり持つように取り組んでいきたい。

（参加者）

オレンジリングの講習については、会として非常にうれしく思っている。認知症の理解からスタートしないと始まらないし、広がらない。担当者だけでなくて、全ての課に関わりがあるという認識を持って、いろんな課の職員の方にも関わりを持って欲しい。

また、愛知県甲府市の認知症の方の踏み切り事故のこともある。もっともっと認知症に対しての関心をもってもらったらうれしい。

認知症をより多くの方に正しく知ってもらうことからはじめないと何も始まらない。他人事ではなく、自分の見に降りかかってくる時代でもある。そのためにも、認知症カフェへの参加について、交通手段が確保できないことが大きなネックとなっている。そのことを大きな課題として持ち帰ってもらいたい。

また、認知症カフェの一つの意義は、誰でも参加できること。認知症と診断されたかたでなくてもお茶を飲みに来てもらうことができる。

受諾事業として、会としても考えて情報をしっかり出していくことと、いろいろな職員さんに顔を出してもらって広めていただくことが大事であると考えています。

■市長まとめ

勉強会ということで来させてもらいました。

本日、いただいたご意見については、市としても課題として捉えている。財政の問題も話しながら考えていかなければならない。

皆さん方にもっと知ってもらいたい。周知をどうすれば良いのかなど、その辺のやり方も工夫していく必要がある。

いずれは私たちも通る道だということをどういう風に感じてもらうか。認知症を持った家庭もそうでない家庭も同じように子どもや孫さんへも、できればようやったのうと言われる庄原市にしていきたい。

この問題は、一朝一夕に解決するものではないが、皆さん方に様々なご意見をいただきながら一緒に取り組んで参りたい。

高齢化率も 40%を超えている。さまざまな悩みや問題はあるが、元気で長生きをしてもらいたいと願っている。

やっぱりしょうばらが一番よのおと思える、感じられるまちづくりのためにがんばっていきたい。また、こういう機会をいただきましてご指導いただければと思います。

ありがとうございました。